

未来の可能性を考えて 行動する責任と勇気



東京大学 助教授
高橋 淳 氏

一.はじめに

専門家の立場から環境問題や食糧問題など我々が置かれている状況をわかりやすく説明せよというご依頼でした。授業や学会ではまさにこのようなことを日常的に話しており、聴衆の反応も良い(もつとも、採点されるレポートに「あなたの授業は退屈だった」と書く学生はいないので授業での良い反応はほとんどあてにならない)のですが、一般向けに専門の話をするのは不慣れで、無上道向けの原稿として何をどう書くべきかとても悩みました。悩んでいるうちに締め切りが来

てしまいましたので、とりあえず、私たち大学の科学者が何を考えながらどのようなことをやっているのかのご紹介から入りたいと思います。

二.大学では何を教えるのか

科学技術の進歩は著しく、昔の大学生と比べると、コンピュータ(情報技術)、バイオテクノロジー、環境問題と学ぶべきことが増えていることも事実ですが、その弊害でしようか(あるいは学習塾の弊害という人も多いのですが)与えられた問題を解く能力は格段に向上してい

possibility in the future

る一方で、問題点を発見したり深く考える能力は著しく低下してきているように思います。これは日本という国全体についても同じことが言えると思います。つまり、日本は先進国の良いとこ取りをして最短距離で追いついてしまったように言われており、確かに経済力は世界第二位までになっていますが、地続きの異国との抗争・交流、植民地政策の精算、移民問題等の難題に長い年月取り組んできた先進諸国に比べると、今後起こりうる問題への備えや

その想像力においてまだまだ未熟な国家と言わざるを得ません。

このような中であって、最近、日本の大学が大きく変わりつつあります。

それは、世界に例のない少子高齢化社会を初めて迎える国として、地球温暖化に関して世界が協調して取り組むことを初めて決めた京都議定書の議長国として、エネルギー自給率が先進国最低の国として、今後の世界の参考になるような取り組みを日本から発信しようとする。

も期待できないという閉塞的状况でした。そこで、大学は国立大学法人化を機会に未来の予測や人類未到の領域へ勇氣を持って踏み込み、自ら解くべき問題を开拓し、英知を結集して解決の道筋を社会に示すことを決めました。学生の教育においても、知識を伝承する従来型のものから、問題を発見して知識と知恵を生み出すトレーニングへと重点を移してきます。

以下では、このような趣旨のもと、私の専門の範囲で、人類の未来のためには何が本当に重要なのかについて考えてきたことをいくつかご紹介したいと思います。

possibility in the future

言う「課題先進国」という考えのもとで、教育や研究を考え直し始めたことです。

まず研究に関して言えば、正直、日本の大学はキヤッチアップ体質からの転換ができておらず、外国人や民間企業が作った問題をその都度解決するという場当たり的な研究が多く、また問題を解決するための技術にしても、これを輸入して磨きをかけることには熱心ですが、自ら先頭に立つて新しいことに挑戦することが少ないばかりか、競合する解決技術や解くべき問題群の俯瞰を怠った不適切な問題設定や解決アプローチが多く、創造的な学生を輩出するという教育効果

ます。

三. 本当に大事なことは何か？

競争をしない社会は停滞しますが、無秩序に競争を奨励する社会は荒廃します。そこで人類はルールのもとでの競争を行う社会を構築してきましたが、実はそのルールが機能して社会が安定するのは未来のビジョンが共有できていることが前提となります(仮定の敵を設定して政権を延命させるワンパターンの国もあります)。規制緩和により競争が奨励され新たなルールが設けられつつ

